

批判的コスモポリタニズムへの風土論の寄与

——和辻哲郎とアルフレート・シュッツ——

太田和彦

一 時事的背景、先行研究、具体的課題

近年、グローバリゼーションが急速に進んだ世界における、地域性と倫理を捉える観点として、和辻哲郎の思想が、国内外で再評価されている。特に着目されるのは、それぞれの国や地域の歴史および文化的な特殊性と、そこから独立した普遍的な規範を、各実践の場においてどのように統合するかという問題である。⁽¹⁾ 相対主義と普遍主義の対立は、倫理学史において継続的に議論のテーマを提供してきた。グローバル化した世界における地域性というテーマも、その一つと言える。しかし、地理的に隔たった場所に住む人々との、お互いに地理的条件に根ざしつつも開放的な交流が、情報化の進展によってますます容易になる一方、多くの国が過激な排外主義や、人種、性別、国籍に関連した憎悪表現という社会的問題を抱えている。この状

況下で、地域の特殊性と普遍的規範の止揚または相互浸透というテーマは様々な観点からくり返し問い直されるべきと言えるだろう。⁽²⁾

特にマーフィが提起する、和辻思想を「批判的コスモポリタニズム」(critical cosmopolitanism)のさらなる展開の契機として捉える観点は、和辻思想の再評価に留まらず、上記のテーマに関わる哲学的思索を政治学や社会学と結びつける経路として期待される。⁽³⁾ そこで本論文では、マーフィの議論を参照しつつ、批判的コスモポリタニズムと同概念に寄せられる批判と課題を整理し、その課題を和辻哲郎の風土論の枠組みのなかで捉え直し、グローバル化した世界における地域性というテーマの議論の深化に資する新たな観点を提起することを旨とする。

まず、批判的コスモポリタニズムの理論的枠組みについて以下に整理する。同概念は、社会学者ジェラード・デランディに

よって提起された。⁽⁴⁾ デランデイは、コスモポリタニズムは、グローバルゼーションとローカリゼーションの相互浸透の現場においてこそ要請されるものであると、二〇〇〇年代後半から一貫して主張している。この主張の意味するところは、コスモポリタニズムはグローバルイズムとは異なり、むしろ「グローバル化への規範的批判」⁽⁵⁾ であるという点にある。この場合の「批判」とは、資本主義やヨーロッパの歴史のまたは認識的な枠組みを絶対視することなく、世界観に相違がある複数の当事者が対話を持続させるための源泉を特定しようとする営為を指す。⁽⁶⁾ この批判的コスモポリタニズムは、従来のコスモポリタニズムに寄せられる批判——エリート主義、西欧中心主義、人々の間の地理学的あるいは歴史的な相違点の看過、統合によって一方を他方に同化させることへの無配慮など——への応答として位置づけることができる。

しかしマーフィは、デランデイが、(A) 常に合意に至るわけではない人々のあいだの緊張関係やそれを緩和する機会についての分析、(B) 個人々が一つではない普遍性を希求するべきことの倫理的基礎づけについての分析を、いずれも十分に行っていないことを指摘する。⁽⁸⁾ マーフィは、和辻哲郎の思想がこれらの課題に対して豊かな説明を提供することができる⁽⁹⁾ と主張する。

それでは、和辻哲郎の思想を批判的コスモポリタニズムと結びつけることに正当性はあるのだろうか。和辻は、一般的にコ

スモポリタニズムに属する思想家とは見なされていないばかりではなく、対立する立場のように位置づけられることさえある。⁽¹⁰⁾ しかし唐木が指摘するように、夏目漱石の門下に集まった阿部次郎や和辻らの世代が、因習からの脱却を試み、教養を通じて個性を伸長しようとする傾向を共有しており、一九一五年に刊行された和辻の初期の著作『ゼエレン・キエルケゴール』⁽¹¹⁾ において、和辻がコスモポリタニズムを「第二のルネッサンス」⁽¹²⁾ として表現していることを鑑みれば、和辻とコスモポリタニズムの親和性は高いと言える。勝部は、日本回帰と呼ばれる和辻の転換期において、和辻がコスモポリタニズムからも離れたと整理しているが、一九二〇年に刊行された『日本古代文化』⁽¹³⁾ において和辻が古代日本を賛美する文脈は、古代日本のもつ中国・朝鮮との「混血性」や、文化発達における渡来人の役割の大きさ、シルクロードを通じた文化の共有などのコスモポリタニ的性格であることは重要である。⁽¹⁴⁾

和辻風土論におけるコスモポリタニ的性格は、一九二八年に雑誌掲載され、一九三五年に書籍として刊行された『風土』の第二章における風土の類型化においてよく見出される。今日、倫理学者からも地理学者からも批判を受ける風土の類型化であるが、その企図は環境決定論に留まるものではない。⁽¹⁵⁾ 和辻は同章において、牧場型、砂漠型、モンスーン型という風土の類型化を行った後で、その企図を次のように述べる。「風土の類型化は」ちょうどそれにおいて最も鋭く自覚の実現せられ得る優越

点を提供する。……牧場的風土においては理性の光が最もよく自覚せられる。モンソーンの風土においては感情的洗練が最もよく自覚せられる。……風土の限定が諸国民をしてそれぞれに異なった方面に長所を持たしめたとすれば、ちょうどその点においてまた己れの短所を自覚せしめる。……「この長所と短所を互いに学び得ることにより、人々は」風土的限定を超えて己れを育てて行く⁽¹⁶⁾。つまり、風土の類型化は人々の風土的限定を示すものであるが、この類型化は、限定を超えて相互理解に至るためのいわば補助線であると和辻は述べる。続く、「風土的限定の内に無自覚的に留まるのではなく、限定を自覚することによってその限定を超えたからといって、風土の特性が消失するわけではない。否、むしろそれによって一層よくその特性が生かされてくるのである⁽¹⁷⁾」という言葉及は、和辻の思想、とりわけ風土論を批判的コスモポリタニズムと結びつけることの妥当性を示すと言える。

ここで先述のマーフィの議論を再確認する。マーフィは、和辻の「風土」や「間柄」概念を、社会空間を均質化することなく相互依存性を認める想像力を涵養する枠組みとして意義づけることにより提供できるといふ観点から、和辻の思想を用いてデランディの批判的コスモポリタニズムの補完をしようと試みている⁽¹⁸⁾。しかし、(A)常に合意に至るわけではない人々のあいだの緊張関係を含意するものとしての地域性は、和辻の理論的枠組みのなかでどのように位置づけられるのか。人々のあ

いだの知識や世界観、利害関心の相違は、どのように条件づけられていると言えるのか（「風土的限定」に関する問い）。(B) 国や地域の歴史のおよび文化的な特殊性と、普遍的な規範的理論の相互浸透は、和辻の理論的枠組みのなかでどのように位置づけられるのか。風土的限定の乗り越えの可能性と希求は、どのようなものとして示されるか（風土的限定を超えて己れを育てて行く⁽¹⁶⁾ ことに関する問い）、という課題の検討は十分なものではない。

そこで本論文では、上記の二つの課題に対して、和辻哲郎の風土論と、社会学者アルフレート・シュッツ (Alfred Schütz, 1899-1957) の生活世界論との比較を通じて検討を行う。和辻の風土論とシュッツの生活世界論の近似性はすでに指摘されているが⁽¹⁹⁾、本報告はその近似性が意味する実践的・理論的射程を、批判的コスモポリタニズムの深化という観点から明らかにするものである。和辻とシュッツとの比較を行う具体的理由としては、次の二点があげられる。

(A) 和辻とシュッツの共通点の検討からアプローチ。シュッツの諸理論は「人々の知識や世界観、利害関心は、何によってどのように条件づけられ、拘束されているのか」という課題を主に扱う知識社会学⁽²⁰⁾の展開に大きく寄与しており、和辻の「風土的限定」の考察を析出する触媒として有効であると考えられる。この析出は、地域性に関する考察の深化に資する。

(B) 和辻とシュッツの相違点の検討からアプローチ。シュッツ

ツは、フッサールの現象学を社会学のなかに応用することによって「現象学的社会学」(phenomenological sociology)を展開したが、フッサール自身が企図していた「超越論的」現象学という観点そのものは継続させなかった。これに対して和辻は、風土論以前より行っていた原始仏教学研究においてフッサールの『イデー』を参照していたことが、風土論における「風土的限定を超えて己れを育てて行く」というコスモポリタニズム的側面にとどのような影響を及ぼしているかを析出する触媒として有効であると考えられる。この析出は、地域の特殊性と普遍的な規範的理念の相互浸透に関する考察の深化に資する。

二 比較分析

1 常に合意に至るわけではない緊張関係を含蓄するものとしての地域性、「風土的限定」に関する問い

——和辻とシュッツの共通点からの検討

先述のとおり、犬飼裕一は『和辻哲郎の社会学』(二〇一六)のなかで、和辻の「間」(あいだ)の思想にもとづく風土論から倫理学に至る一連の著作が、一九三〇年代の社会学の展開ならびにフッサールの現象学に深く根ざしていることを指摘している。とりわけ『風土』との近似性が高い、同時代の社会学に関する著作は、アルフレート・シュッツの名著『社会的世界の意味構成』(初版、一九三二)である。和辻はシュッツの著作そのものに接する機会をもたなかったと考えられるが、社会

の規範・秩序が相互行為やコミュニケーションといった関係的な事象から生じるというシュッツの現象学的社会学の構想は、和辻の「間」の思想の発想と際立って類似している。⁽²²⁾

ここで、シュッツの現象学的社会学とその背景について簡単に概観する。シュッツは、社会を、他者の行為を理解するために人々が構成した意味的世界として捉える。そして、人々が行為に対して日常世界での間主観的な常識にもとづいて意味(一次的概念)を付与する活動と、その意味のなから特定の関心に沿って選り取り再構成した知識(二次的概念)を生産する活動に分け、個人に閉じた営みとして捉えられてきた「理解」や「意味」、「知識」を、社会的な相互関係の作用として検討し直したことがシュッツの業績であると整理できる。

シュッツが一次的概念と二次的概念の二つの水準で「理解」意味「知識」を再検討した背景には、フッサール(Edmund Husserl, 1859-1938)が一九三六年に刊行した晩年の講義録『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』の強い影響がある。第一次大戦における蹉跌をふまえ、フッサールは同講義において、科学的観点が理念の衣によって「生活世界」(Lebenswelt; life-world、現にある世界)を隠蔽し、転倒させる機能を指摘した。例えば、ガリレオの落体の法則によれば、重さがちがう物体も同じ速度で落下することになっている。しかし、現にある世界では気圧や摩擦の影響により鉄は紙片よりも速く落下する。このとき、私たちが現に住んでいる世界は雑音や不純物に

満たされており、自然科学の法則がそのまま成り立つ世界こそが本物の世界であると思うことが、理念の衣による生活世界の隠蔽・転倒である。シュッツはフッサールの用いた生活世界を、日常生活の世界 (world of everyday life) と捉え直し、一次的概念が成立するステージとして位置づけた。⁽²³⁾

シュッツは、生活世界における思考は次のような特徴をもつことを指摘している。①これまでですでにその社会がすっかりできてきた「知識の集積」(stock of knowledge)にもとづいて物事を判断する。②何かに注意を向ければ、同時に注意を向けられない何かが必ず生じる。シュッツはこのことを「レリヴァンス」(relevance) という概念でまとめる。⁽²⁴⁾ ③人々が日常生活において、隣人も自分と同じように世界を見ていると想定しあっているとき(相互主観性が成り立つとき)、それはレリヴァンスが共有されている状況である。④相互主観性が成り立たない可能性がある匿名の人々に対しては「知識の集積」のなかの「類型」(type)にもとづいて判断する。

人々の思考能力は限られているため、人々の共同生活は、上記のような生活世界の特徴の上で初めて可能になることをシュッツは示唆する。人々は社会に、自分を取り巻く現実とは異なる多元的な現実 (multiple reality) があることを、カルチャーシヨックのような体験や空想、幻覚などによって体感することがある。しかし、レリヴァンスがある以上、何をどこまで考慮して何を無視するかという選択によって成立する生活世界の条件

を棄却することはできない。⁽²⁵⁾

シュッツは、共同生活を成り立たせる生活世界(＝日常生活の世界)について次のように述べる。「私の日常生活の世界は、決して私だけの私的な世界ではなく、はじめから間主観的な世界である。……私が常に自己をそのなかに見出す歴史的に与えられた世界は、自然的世界としても社会文化的世界としても、私の生まれる前から存在し、私が死んだあとでも存在しつづける。このことは、この世界は私の世界であるばかりでなく、仲間の人間たちの環境でもあるということの意味している。……言いかえるならば、歴史的に与えられた自然・社会・文化の世界において、われわれは自己を、独自の生活史的状況のなかに見出すのである」⁽²⁶⁾。この記述と、和辻の『風土』における「人間存在の構造契機としての風土性」⁽²⁷⁾、「文芸、美術、宗教、風習等あらゆる人間生活の表現としてあらわれる」⁽²⁸⁾「風土は人間の自己了解の仕方である」という記述を重ねたとき、風土を生活世界として、そして、「風土の限定」を「レリヴァンス」として位置づけることができる。⁽²⁹⁾ この位置づけからは、地域性を、知識が構成されるときにその前提となる間主観的な一連の選択として示すことを導くことができる。⁽³⁰⁾

しかし、シュッツの議論からは「レリヴァンス」のもたらす知識や世界観、利害関心に対する条件づけや拘束を乗り越えようとする希求や可能性を導出することは困難である。この点について、以下のシュッツと和辻の相違点に焦点を当てた比較を

通じて、和辻が「風土的限定を超えて己れを育てて行く」こととして何を企図していたかを示す。

2 地域の特異性と普遍的な規範的理念の相互浸透、「風土的限定を超えて己れを育てて行く」ことに関する問い

——和辻とシュッツの相違点からの検討

梅村は、シュッツの理論的枠組みが、フッサールの超越論的現象学（現象学的還元によって自然的経験を超えて、それを可能にしている超越論的経験について検討すること）⁽³¹⁾を出発点にしつつも、他我の公正に関する超越論的な問題設定を断念し、間主観性を生活世界の所与と見なして、それ以上の検討を留保することによって彼の理論構築における負担を減らしている点を指摘している。⁽³²⁾

和辻もまた、一九三四年に刊行した『人間の学としての倫理学』では、「行為的連関」に関する検討において、ハイデッガーの存在論に接近する一方でフッサールの超越論的現象学の構想からは距離をとっているため、⁽³³⁾一見、シュッツと同様に、超越論的な問題設定を回避しているように考えられる。しかし、一九二七年に刊行された、和辻の博士学位論文「原始仏教の実践哲学」、一九三二年発表された論文「仏教哲学における『法』の概念と空の弁証法」では、和辻は『イデーネン』第一巻を引用し、仏教哲学とフッサール現象学の類似性を強調している点は注目される。例えば、苅部は、和辻が仏教哲学における五穂（色受想行識）などのダルマ（法）を、「日常生活的に交渉する現

実の存在者」についての「存在する仕方」「存在の『かた』⁽³⁴⁾」であると述べ、自己が日常生活において現象世界を知覚する際に、その経験を可能にするカテゴリーとして位置づける構想について、フッサールの本質直観や現象学的還元の主張が下敷きとなっていることを指摘する。⁽³⁵⁾和辻は、風土論および倫理学に関する著作執筆の前段階において、主観—客観二元論の枠組みへの批判理論として、超越論的現象学と仏教哲学を併せて受容していたと言える。

フッサールの超越論的現象学の構想は、表面的には、その後の和辻の著作群のなかで積極的に語られることはなく、むしろ、ハイデッガーとの対比のなかで回避される傾向にある。しかし、フッサールが『イデーネン』において、現象学的還元を、判断中止（エポケー）によって、超越的な世界の諸事物を純粹意識へと連れ戻す作業として位置づけている点、そして超越論的現象学を、「永遠の相のもとに」ではなく、⁽³⁶⁾「自分たちの視点から」事柄を記述することを要請する学問領域として特徴づけている点をふまえると、和辻が一九三七年に刊行した『倫理学（上）』で、全体性における規範の根拠に、竜樹の空概念に依拠した「超越的原理」として否定の運動を置き、記述対象の動態性を確保しようとした点は、フッサールの超越論的現象学の積極的な受容として位置づけることができる。⁽³⁸⁾

この否定の運動こそが、現実の把握の仕方、実践的な理解の仕方、表象の仕方、想像力、感情や衝動、そして幸福のあり方

を条件づける「風土的限定」を自覚し、超え出ようとするコスモポリタニズム的な動機の源泉であると本論文は位置づける。このように位置づけることにより、「風土的限定を超え出る」ことが、「風土的限定の特性をよりよく活かす」という和辻の『風土』における叙述は、「世界についての経験や認識の基礎づけのために自らの風土的限定を超え出ること（フッサールにおける「判断中止」）によって、風土的限定が思い込みを取り除かれたかたちで（フッサールにおける「括弧に入れられた」状態）現れるのである」という読み替えが可能となる。

以上から、知識や世界観、利害関心に対する条件づけや拘束を乗り越えようとする「風土的限定を超えて己れを育てて行く」試みを、シュッツが断念したフッサールの超越論的現象学の構想、ならびに和辻が仏教哲学研究にもとづいて倫理学内に採り入れた「否定の運動」と関連づけて示すことができた。ここから、地域の特異性と普遍的な規範的理念の相互浸透に際しては、現象学的還元あるいは「否定の運動」がその可能性と動機を開くものであるという視座を導くことができる。

三 まとめ

排外主義の高まりやグローバリゼーションの拡大、学際研究の一般化によって要請されるコスモポリタニズムの再検討の潮流のなかで、批判的コスモポリタニズムはグローバリゼーションとローカリゼーションの相互浸透の現場に着目することので、

西欧中心主義やエリート主義を脱しようとする。しかし、(A)常に合意に至るわけではない人々のあいだの緊張関係についての分析、(B)個人が一つではない普遍性を希求するべきことの倫理的基礎づけについての分析は、いずれも十分ではないという批判がなされている。

この課題に対処するための視座として、和辻哲郎の風土論を援用する試みがある。風土論の枠組みと語彙に当てはめれば、上記の二つの課題はそれぞれ、(A)「風土的限定」に関する問いと、(B)「風土的限定を超えて己れを育てて行く」ことに関する問いとして整理することができるだろう。

この問いに対して、和辻の風土論とアルフレート・シュッツの現象学的社会学の比較思想的分析を行った結果、両者の共通点からは課題Aに関する見解が、両者の相違点からは課題Bに関する見解を導出することができた。すなわち、(A)人々の知識や世界観、利害関心を条件づけ、拘束する「風土的限定」のメカニズムの内容を、シュッツの「レリヴァンス」概念との類似性の検討を介することによって、何を注目し同時に何を無視するかという、知識が構成されるときにその前提となる間主観的な一連の選択として示すことができた。(B)知識や世界観、利害関心に対する条件づけや拘束を乗り越えようとする「風土的限定を超えて己れを育てて行く」契機を、シュッツが断念したフッサールの超越論的現象学の構想として、ならびに和辻が仏教哲学研究にもとづいて倫理学内に採り入れた「否定

の運動」として示すことができた。

以上の研究成果は、批判的コスモポリタニズムの理論的補完への寄与、ならびに、グローバルゼーションとローカリゼーションの相互浸透が、通信技術のますますの発展に伴い、その境界面を拡大するなかで、悲劇的な結末を迎えないようにするための比較思想的観点の一つとして機能することが期待される。風土研究においては、「間風土的主体」の成立の契機を検討する一つの観点を提起し得たと考えられる。残された理論的課題として、行為連関的観点の有無が、本論文の結論に及ぼす影響があげられる。行為連関的観点をもたないフッサールが現象学に込めた、超国家的な(ただしヨーロッパ主義的な)「普遍学」の構想ならびにその実践的転換は、「初期の仏教研究より後に)和辻が構想した「風土的限定を超えて己れを育てて行く」ことは異なる種類のコスモポリタニズムを示唆する。このことが意味する事柄については別途、検討が必要であると考えられる。

(1) Sevilla, A. L., "Universality vs. Particularity: Local Ethnics in a Global World". *Watsuji Tetsuro's Global Ethnics of Emptiness* (pp. 129-174), Palgrave Macmillan, 2017.

(2) このテーマは、トランスナショナルリズム、多文化主義、間文化主義、コスモポリタニズムなどの文脈において議論が蓄積されており、下記の論文ではそれらの議論が整理されている。西原和久「越境する実践としてのトランスナショナルリズム——多文化主義をこえるコスモポリタニズムと間文化主義への問い——」『グローバル研究』(2)

二〇一五年、一—二四頁。

- (3) Murphy, M., The critical cosmopolitanism of Watsuji Tetsuro, *European Journal of Social Theory*, 18(4), 2015, pp.507-522.
- (4) Delany, G., "Introduction: the emerging field of cosmopolitan studies", Delany, G. (ed.), *Handbook of Cosmopolitanism Studies*, Routledge, 2012, pp.38-46.
- (5) Delany, G., *The Cosmopolitan Imagination: The Renewal of Critical Social Theory*, Cambridge University Press, 2009, p.250.
- (6) *ibid.*, pp.186-192.
- (7) 例えばハーヴェイは、コスモポリタニズムの掲げる自由や解放といった理念が、地理的状況の複雑さを無視したことにより、新自由主義やグローバルリズムの過度の正当化を招き、かえって分断を生じさせている今日の状況を指摘している。下記の文献を参照のこと。デヴィッド・ハーヴェイ『コスモポリタニズム——自由と変革の地理学』(二〇一〇年)、大屋定晴、森田成也、中村好孝、岩崎明子訳、作品社、二〇一三年。
- (8) Murphy, *op. cit.*, pp.511-512.
- (9) *ibid.*, pp.518-519.
- (10) 河野哲也「コスモポリタニズムとその敵——政治と形而上学」哲学期叢 四十二、二〇一五年、一—三三頁。
- (11) 唐木順三「現代史への試み——型と個性と実存」『唐木順三全集 第3巻』筑摩書房、一九四九年。
- (12) 和辻哲郎『和辻哲郎全集1』岩波書店、一九六一年、四一一頁。
- (13) 勝部真長「青春の和辻哲郎」中公新書、一九八七年。
- (14) 苅部直「光の領国・和辻哲郎」創文社、一九九五年、九七—九八頁。
- (15) 山口幸男「人間及び人間社会の存在の風土性・空間性に関する地理教育論的考察」『新地理』五十四(四)、二〇〇七年、三四—四二頁。
- (16) 和辻哲郎『風土』岩波書店、二〇〇七年、一四三頁。
- (17) 同前、一四四頁。
- (18) Murphy, *op. cit.*, p.507.

- (19) 大銅裕一『和辻哲郎の社会学』八千代出版、二〇一六年。
- (20) 大銅は、和辻が『風土』や『人間の学としての倫理学』において、「人々が倫理的であると価値判断している様態を観察する学としての倫理学」（大銅、前掲書、二六頁）の探究が前面化していることによつて、「倫理そのものを括弧に入れたその社会的なあり方を解明する」（同、二七頁）という和辻の姿勢は、倫理学というよりむしろ知識社会学と呼ばれるべきものであると述べている。
- (21) 牧野英二『増補・和辻哲郎の書き込みを見よ！——和辻倫理学の今日的意義』法政大学出版社、二〇一〇年。
- (22) 大銅、前掲書、四八〜四九頁。
- (23) アルフレート・シュッツ、トーマス・ルックマン『生活世界の構造』（一九七三年）、那須壽訳、筑摩書房、二〇一五年、四三〜七六頁。
- (24) 同前、三六三〜四八頁。
- (25) 同前、七八〜九九頁。
- (26) アルフレート・シュッツ『現象学的社会学』（一九六二年）、森川眞規雄、浜日出夫訳、紀伊國屋書店、一九八〇年、二四七〜一四八頁。
- (27) 和辻、前掲『風土』三頁。
- (28) 同前、一七頁。
- (29) 同前、二六〇頁。このことは、風土的限定を、現実の把握の仕方、実践的な理解の仕方、表象の仕方、想像力、感情や衝動、そして幸福のあり方を条件づけるものとして位置づける和辻の観点とも一致している。
- (30) シュッツ、ルックマン、前掲『生活世界の構造』六〇〜八九頁。
- (31) フッサールが一九一三年に、彼自身が編集に携わった『哲学および現象学研究年報』の第1号に掲載した「純粹現象学と現象学的哲学のための諸構想」（以下、『イデーネン』）では、「超越論的経験」に関する検討を行うために、「自然で月並みな経験（die natürlichen, weltliche Erfahrung）を行っているときの態度を徹底的に変更する」ための手続きとして現象学的還元が位置づけられている。詳しくは、下記の文献を参照。エドムンド・フッサール『イデーネン1—1』（一

- 九一三年）、渡辺二郎訳、みすず書房、一九七九年、一六頁。
- (32) 梅村麦生「A・シュッツの同時性論」社会学評論、六七（二）、二〇一六年、一六六〜一八一頁。
- (33) 和辻、前掲『風土』四七〜四八頁、一六五〜一六七頁。
- (34) 和辻哲郎『和辻哲郎全集9』四六九頁。
- (35) 菊部、前掲『光の領国・和辻哲郎』一六七〜一六八頁。フッサールもまた、超越論的現象学において、知識が果たす役割を、①知覚や思考の充実がいかに行われ、自然的経験や認識がいかに成立するか、②経験や認識はどのように類型化できるか、という問いに答えることであると述べている。
- (36) スピノザの『エチカ』に代表される、神の視点からの静態的な世界の記述がここでは退けられている。
- (37) エドムンド・フッサール『イデーネン1—2』（一九一三年）、渡辺二郎訳、みすず書房、一九八四年、一三九〜一四〇頁。
- (38) 関根清三『旧約における超越と象徴』東京大学出版会、一九九四年、三七〜三八頁、一一二頁。
- (39) 木岡伸夫『風土の論理——地理哲学への道』ミネルヴァ書房、二〇一一年、三一〜三二七頁。
- (40) 森村修「フッサール『普遍学』とその倫理的転回」東北大学大学院文学研究科、一九九六年。

謝辞…本研究は総合地域環境学研究所「EES」プロジェクトの助成（14200116）を受けた。

（おおた・かずひこ、環境倫理学・風土論、総合地球環境学研究所）